

三人閑談 楽しい双子ライフ

著者	天羽 幸子, 志村 恵, 安藤 寿康
雑誌名	三田評論
巻	1067
ページ	68-81
発行年	2004-04-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/9911

楽しい双子ライフ

双子に出会って

安藤 皆さんそれぞれ研究領域でも双子にかかわっており、しかも本人も含め家族の誰かが双子だという、公私にわたり双子ライフを送られている(笑)。いわば逃れられない一生を背負っているわけですが、まず天羽さん、双子にかかわるようになった経緯から話していただければと思うのですが。

天羽 私は双子の母親なのですが、でも双子の母だったから双子の研究

を始めたのではなく、たまたま東大の教育学部が双子の研究をすることになり、私もその一員として加わることになったのがそもそも始まりです。その当時といっても今から五十年前も前になります。「一卵性は同じ遺伝子をもつものだから、性格は全く同じである」というのが定説でした。でも行動観察でみられた一卵性双生児の性格の違いに焦点をあてて研究をスタートさせたのです。

東大附属は中学からで、性格の違いを調べるなら、もっと年齢の低い子どもから観察したいと六年ほどで

東大附属をやめたところ、自分が双子の母親になることになってしまいました。息子たちは一卵性で、身近には双子の人はいませんでした。神さまが私の願いをかなえてくださったのだと思い、今まで調べたかった項目についてチェックリストを作り研究者と母親の二役の生活に没頭することになりました。考えていたよりずっと早く性格の違いが見られるようになることがわかったのです。

安藤 生まれたときから、はつきりそれとわかる違いはありましたか。

天羽 おっぱいの飲み方から違って

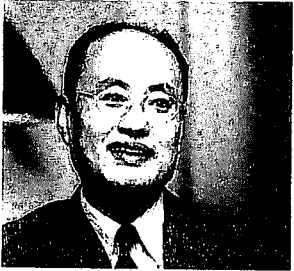
あま 天羽 幸子
 し 志 村 恵
 あん 安藤 寿康



天羽幸子 東京大学教育学部附属
中学・高校で双生児の研究を行う。
その後、自ら双生児の母となり、双
生児の母親の会ツインマザースク
ラブを設立。同会会長。専門は発達
心理学。元日本双生児研究会会長。

いましたね。一人は真面目といつてはおかしいのですが、始めから終わりまできちんと飲む。もう一人は急いで飲むかと思うと、遊んでお休みをするというようにムラがあります。これが性格の違いを表わす出発点でした。出生時体重も先に生まれ たほうが二六〇〇で、あとのほうが三二〇〇と五百グラムも違ったんです。私は小柄でしょ。一人は単胎児の標準体重ですからね。

志村 それは大変でしたね。
天羽 それで結局二年間、いろいろなことを調べ上げ、最初にみられる



志村 恵 金沢大学文学部助教
授。専門はドイツ文学。名古屋大
学、ミュンヘン大学に学ぶ。1994
年より現職。日本双生児研究会
幹事。

性格の違いや、その後の発育に出生時の体重差が影響を与えるものなのかどうか、どうしても調査したいと思いました。

近所の双子の家庭や、私のこと
を伝え聞いて、協力してもよいと申し出られた十二組の家庭を月に一回ずつ訪問して調べました。一卵性でも性格の違いが早くからみられること、出生時体重の差とその後の発達の関係などとても面白かったです。

安藤 天羽さんのお子さんの場合も、やはり体重があったお子さんのほうが元気で発育も早かった？



安藤寿康 慶應義塾大学文学部教
授。専門は教育心理学、行動遺伝
学。日本双生児研究会幹事。双
生児法を用いて教育の問題として
の遺伝・環境問題の実証的研究を
行っている。

天羽 全体を通してみればそうでしたけれど、一般的に体重が重かったからといって必ずしも運動発達も早いとは言い切れない。特に歩き出しは、かなり性格的なものがかかわっていて、冒険好きで、活発なほうの人が急に歩き出したりしました。

安藤 そのときの家庭訪問がまさにツインマザースクラブの始まりだったわけですね。

天羽 そうです。先に双子を育てた人がいろいろアドバイスしてあげたら、どんなに助かるだろうと思って。息子たちが小学校に入学するまで四

年間待つて、そのあと立ち上げたの
です。もういったん始めたら途中で
やめるわけにはいかない支援だと思
いましてね。それから三十五年続け
ているので、息子たちももう四十二
歳になってしまいました。

双子と（きょうだい）

安藤 一卵性の違いといえば、ま
さにその一卵性双生児である志村さ
ん、いかがですか。

志村 私は戸籍上も兄になっている
のですが、両親が非常に民主的とい
うか公平な人だったせいとか、「兄」
とか「お兄ちゃん」と呼ばれたこと
が一度もありません。そういう意味
で僕と同年代の平均的な双子の性格
の違いを語る資格があるかどうか難
しいと思うのですが、やはり似てな
い部分のほうが目につき、自分で
はかなり違うと思っています。

天羽 それで志村さんはいま金沢に
お住まいですけど、ずっと金沢でお

育ちになったのですか。

志村 いえ、高知で生まれ、義務教
育は香川県です。

天羽 じゃあ主に四国で育ったわけ
ですね。

志村 だから都会の文化に染まって
育ったわけではないのですが、両親
がかなり今風というか現代的な育て
方をしたらしく、それで二人の個性
が違う方向に分かれていったのでは
ないかと思っています。

天羽 私が調べたところでは、双子
でもきょうだいの序列をつける親は
北陸の人が一番多いんです。それで
私はもしかしたら志村さんは金沢で
ずっと育ったのかなと。

志村 金沢はいまでもそうした雰囲気
気ですよ。例えば泊まりがけでなく
ても母親が出かけることに、家庭の
縛りというものがあるようです。育
児サークルやお話会の集まりなどに
さえ、夫が在宅していたら絶対に出
かけられないという方が結構いらっ
しゃる。それくらい家父長的な風土

があります。だから男の僕が子ども
を、だっこバンドでだっこしてうろ
うろしていたら、目を見張って驚く
人も結構いました。

天羽 男性が育児にかかわるなんて
おかしいというわけですね。

安藤 私が双子の研究を始めたのは
大学院に入ったら、遺伝と環境の研
究をしたかったからなのです。
もともと教育学に関心があつて、「鈴
木メソッド」というバイオリンの早
期教育で有名な鈴木鎮一さんの「人
は環境の子なり。どの子も育つ、育
て方ひとつ。才能は生まれつきでは
ない」という極端な環境論に基づい
たものではあるけれど、すごくヒュ
ーマニステイックな教育理念に感銘
して、その理論を科学的に証明して
みようと思いました。ちょうどその
頃、欧米で行動遺伝学の研究が盛ん
になりはじめて、その主要な研究方
法が双生児法でした。それがそもそ
ものきっかけだったのです。

そのとき同級生に、いま私の家

内になつてゐる双子の女性が、いまして、決して下心があつて接近したわけじゃあないのですけれど、付き合ひ始めたのと研究を始めた時期が重なつたものですから、彼女に最初の被験者になつてもらつた（笑）。

志村 うまい具合にそういう同級生がいたということですか。

安藤 そうですね。家内の家は教育一家で、家内もその双子の姉も学校の教員をしています、私が聞いた範囲では、育て方に関してはずいぶん異なつた育てられ方をしたそうです。上と下をはつきりさせて育てるという家風の家だつたようですね。天羽 双子なのに上下をつけて育てたということですか。

安藤 ええ。ただ、生まれたときからうちの家内のほうがわんぱくだつたらしいのですが（笑）。それで「姉と弟」というふうになつていたようです。でも私から見ればやつぱり基本的にはよく似ている。一度間違えてしまつたことがあるくらい。

天羽 毎日観察していらつしやる夫が間違えた（笑）。

安藤 いえ、まだ結婚前だったので、後ろ姿とか持つてゐる全体的な霧囲気が同じだったので、後ろから肩をたたいたのです。振り返つたときの何気ない表情をみて、あつ間違えた、と気づいたんです。そのときはやつぱりシヨックでした。

志村 そう、後ろ姿だとよく間違えられます。僕も弟の連れ合ひに間違えられたことがあります。彼女はシヨックでかなり落ち込んだようです。身振りとか声のトーンがそっくりなので、少しでも顔が見えれば間違えることはないのだけれど、後ろ姿だとわからないみたいです。

天羽 それはそうと双子の場合、先に生まれたほうを兄とするようになったのは病院での出産がふえた頃からといわれてゐますけれど。

志村 でも実態はそうなつてないというか、小さい頃よく「どちらが兄で、どちらが弟ですか」と必ず聞か

れました。「僕が兄です」と答えたらず「じゃあ、あとに生まれたんですね」と言われましたから。比較的最近までみんなそう思つていたのではないのでしょうか。

安藤 あとに生まれたほうを上と見たのは、より長くお母さんの子宮にいたという理由でしたっけ？

天羽 実は理由はよくわからないのです。お腹のなかで上にいたから、先に生まれたからといつても、しょつちゆう上になつたり下になつたりしてゐて、いよいよ生まれる段階になつて位置が決まるようですね。

双子の類似性

安藤 息子さんたちが結婚して別々に暮らすようになり、しばらくぶりに帰つてきたときに間違えるようなことはありませんでした。

天羽 私は間違えたことがあります。私が、父親はしよつちゆう間違えていました。

安藤 それぞれの奥さんはどうおっしゃっているのでしょうか。

天羽 二家族一緒に遊びにくる人が多いのですが、息子たち二人が無意識にテレビを見ているときとか、くしゃみをするときとか、そういうのがすごく似ていると言つて、奥さん同士で笑い転げている。

志村 その点、うちの場合、弟が髭を生やしているのです、いまは間違えられることはないですね。

安藤 それは意図的に差異化しようとしているということですか。

志村 それはどうかわかりませんが、ただ電話はだめで、よく間違えられます。弟の子どもにも、お父さんだと思つていたら叔父さんだつたといつて何回か電話口で泣かれたこともあります。また一卵性だと、においも似ているようで、弟が飼つていた老犬が間違えてすり寄つてきて大笑いになったことがあります。

安藤 あまり意識していない部分により類似性が出てくるとか、様々な

研究があるのですが、アメリカのミネソタ大学に別々に育つた双子を百組ほど集め、一週間ほど滞在してもらい、たくさんのデータをとつた研究があります。

そのとき何も言わず、壁の前に二人を並べて写真を撮ると、一卵性の双子の場合は立っている格好とか手の位置とかがとてもよく似ている。

でも二卵性だとそういうのもかなり違つていたということです。おそらく一卵性の場合は身体とか生理的な部分、例えば骨格的にどういふ場所が自分にとつて気持ちがいいとか、全体的なところが非常に似ているからだと思いますけどね。

天羽 志村さんがおっしゃつたようにたしかに声は似ていると思う。例えば夜、私がうとうと眠りかけてポーツとしているとき電話がかかつてきて「これから泊まりに行くからドアチェーンを抜いておいて」と言われても、どちらの息子かわからないときがあるんです。朝起きてそつと

布団をめくつて「当たり前」なんていうこともありますから(笑)。

志村 うちの母も一度だけ電話で完全に間違えていたことがあつたな。

でもうちの場合、結構育児に参加していたこともあつて、父親は間違えたことがないのです。小さいときの僕がわからない写真でも、父親は、どちらかわかりますから。

天羽 結局本人には自分は自分だとわかつているから、区別する必要などないらしいのです。だから赤ん坊のときの二人一緒に寝ている写真を見て、息子が「僕はこっちだよね」といつても、間違つてることがしょつちゅうありましたね。

志村 相手の顔は常に見ていたわけだから、かろうじて判断がつくけど、自分の顔はわからないものなのです。そういう意味で双子というのは、相手を見つめて育つのです。

天羽 そうでしょうね。私が勤めていた東大附属の先生たちが「双子の人相書きを作つてほしい」と言うん

で、カードに「A子は目の下に黒子がある」と書いて渡したんですが、いつもその黒子がわかるところまで近づいて見るわけにはいかないわけで、結局、全体的な感じで見分ける以外ないんです。

安藤 以前あるテレビ番組で、十組ほどの双子の子どもを別々に分けてグループをつくり、それぞれを接触させず、両方とも常に同じ作業をするという三泊四日のキャンプをやったことがありますね。そうすると両グループともリーダーシップをとるのは同じ双子のきょうだいで、そのとり方もそっくりだったり、何となく恋が芽生えたりするペアというのも同じ双子同士のペアだった。

志村 それはよく理解できます。

安藤 それで最後にスタツフがちよつと細工して、十人のうち五人を「ほかの人には言わないで」と言っただけで入れ替えたんです。そのあと一緒にゲームとかやらせて、ずっと同じグループにいた子が、入れ替わったこと

にいつたいどれぐらいの時間で気づくか観察したわけです。なにせ三泊四日一緒に過ごしているのだから、スタツフにも「十分以内で気がつくよ」と言う人が多かった。それに、いくら似ているといつても真正面から見れば結構違っているから割合すぐ気づくだろうと思っていたら、これが一向に気がつかないんです。

かれこれ一時間たつても気づかないので、とうとうスタツフが「実はこのなかに五人にせ者がいるんだけど、誰だか当ててみて」と言っただけで、誰だか当ててみて。でも、そのきつかけは、着ている服がいつもと違ふとか、靴が違うとかそんな表面的なことだったんです。なかには女の双子で、一方は髪の毛が黒く、もう一方は赤く染めていたにもかかわらなく気づかなかつた(笑)。そのときやつと「あつ、髪の毛が違う」と気づいたので。

区別がつかないほど双子はやはりパーソナリティーに遺伝的な類似性

があるのだなと、私もちよつとびつくりしたのですけどね。

双子育てと平等

安藤 それで、ぜひ志村さんにおうかがいしたいのは、双子のきょうだいにとつて平等の扱いというのはどういうものなのでしょう。

志村 双子というのは小さいときから服とか玩具も同じものを与えられ、あるいは教育的チャンスも比較的平等に与えられます。当事者として言えば、子どもの頃は、あつちが多いとかこつちが少ないとか細かいことまで気になることは確かです。でも、あとで振り返ってみると、トータルに公平に扱ってもらってれば、細かい違いなんて問題ではありません。いつもいつも、そんなこと不可能ですからね。とにかく親が二人とも大事で二人とも好きだと、あるいは二人を同じように遇し育てたんだという気持ちさえ伝えていれ

ば、何の問題もないと思います。機械的な平等より、そこは気持ちの問題を優先させたほうが自然です。

天羽 私最近、十九歳以上の双子をもつお母さんを対象に、平等についてどう考えているか、かなり詳しく調査しました。その結果わかったのは、生まれたときは父母ともども二人を平等に扱おうと決心する家庭が多いことです。

しかし二卵性の場合ばかりと早くから性格の違いが出てきて、親も早くからそれぞれ別個に対応するようになるようです。一卵性では、何でも平等平等と育てるのだけど、そのうち子どもたちのほうに自然に違いが出てきて、それはますますはつきりと固定化してきます。そうなって初めて平等な扱いというのは、二人を同じように扱うのではなく、その子が求めているときに真つ直ぐ向き合っただけで、一人ずつに対応してあげることが本当の平等なんだというところに気づくのだと。

志村 それはいいですね。

天羽 それで、母親としては二人がそれぞれ個性をもつて育つてくられて嬉しいという気持ちもあるけれど、それぞれ独立し結婚して年一、二度しか会えなくなると、これでいいんだと思う一方、二人が群れて常に一緒にいた頃の双子のかわいさがすごく懐かしく思い出されるわけです。それから親としてはもちろん普通のきょうだいだっていつまでも仲良くしてほしいと願うわけですが、特に双子のお母さんはいつも何でも二人一緒に揃って育つて欲しいという思いが強く、それも長く続きたいなんです。子どものほうは早くから「双子がなんだ」という感じで独立していきこうとしているのにな(笑)。

安藤 双子には双子の間ならではの人間関係が出てくるみたいですね。例えば研究のために双子さんに来てもらって、個別に脳波をとったりいろいろしている合間に話を聞い

たり、調査が終わったあと同じ部屋にいる二人の様子を見ていたりすると、普通のきょうだいと違って意思の疎通の仕方とか、気持ちの配り方というのがすごくいい感じなんです。双子って本当に羨ましいなと思うことがしばしばありましたよ。

天羽 息子たち二家族がそれぞれ二人ずつ子どもを連れてくると、四人とも一卵性双生児のお父さんの子どもだから何となく似ているし、そういうのが群れているのを見ていると、実際とてもいい雰囲気ですよ。

安藤 双子って見ているだけで楽しいというイメージが強いけど、日本も昔は、双子は畜生腹とか、特にそれが男女であつたら「心中の生まれ変わりである」とか、よくないイメージがつきまわっていた。でも東南アジアやアメリカなどでは、双子とというのは基本的にハッピーな存在と受け取られていますよね。そのあたりの文化的違いというのはどういうことなんでしょう。

天羽 その答えにはならないかもしれないけど、双子と関係ない一般人に「あなたは双子を育てたいですか」という調査をしたら、日本では「イエス」が三〇%ぐらいだったけど、タイでは六〇%の人が「育てたい」と答えています。私が調べた時点で、育てたくない理由にさすがに畜生腹というのではないけど、「経済的に大変だから」とか「平等に育てられないから」というのが多かったのです。その裏に何か隠された理由があるのかもしれませんが。

最近のアンケートで、最終的に「双子を育てることができて嬉しい、とてもよかった」と書いた人が八七%もいました。少なくとも私が考えていたよりずっと多くの人が、双子を育ててよかったと思っているようです。

志村 昔は大変だから、もう二度といやだという人が多かったと聞いています。比較的最近のことだと思いますが、育児支援とか社会的状況が

だんだんよくなってきたこともあって、双子を育ててよかったというお母さんお父さんが増えてきたということでしょうね。

双子と自分探し

志村 双子のイメージの話に戻したのですけれど、近代化される以前は双子を忌むべきものとか、穢れているものとして扱っていた民族のほうが多いようです。双子を最初からハッピーなものとして捉えている民族は少数派ですね。ところが現在は欧米も含め世界的に双子の誕生を喜ぶ人のほうが多くなっているのに、日本の場合、戦前まで片一方を里子に出したりというようなことが普通に行われていた。そのあたりが少し不思議なところですよ。

では、文学や物語のなかで双子がどう扱われてきたかというところ、基本的にはまず光と影とか、善と悪などの二元論の中で扱われることが多

いのです。そういう考え方はゾロアスター教にもあるし、神話の世界をはじめいろいろなものの中にあります。例えば男と女の双子が近親相姦して世界は生まれたというような話もあれば、男の双子のトリックスターのような活躍によって世界が創られたという話もあります。そういう二元論的な世界観なり宇宙観は基本的にどの民族にもあるようです。ただ、いつも善と悪というパターンではありませんが。

また、十八世紀末から十九世紀初頭、近代的自我が確立されていった時代、自我の問題を取り扱った小説などに双子がたくさん出てきます。私とは何だろうと考えること、つまり、もう一人の自分がいて、その相手を鏡のように見ながら我は何者ぞと自分を考えていくというのがいわば双子ものの基本です。

安藤 代表的な作品というところ。

志村 ドイツで言えば、ジャン・パウルの『生意気盛り』やクリンガ

一の『双子』という兄弟争いをテーマにした劇作などがあります。それからネストロイの喜劇に、弟を助けるために入れ替わったりしているうち、本当の自分がわからなくなってくるというような作品もあります。

安藤 必ずストーリーのなかに「同じだけ違う、違うけど同じ」という話が出てきますよね。

志村 そうです。いまテレビでやっている、小錦や野村萬斎が出ている「日本語で遊ぼう」という番組で、シエークスピアの『間違いの喜劇』の狂言版の中のお囃子ことばが出てきて、子どもたちに流行っているが、そこにいま安藤さんがおっしゃったことが見事に表現されています。「ややこしや、ややこしや、そなたが私で、私がそなた」。

安藤 シエークスピアの作品にも双子が出てくるんですね。

志村 『十二夜』『間違いの喜劇』と二作品あります。シエークスピア自身も双子のお父さんでしたから。

天羽 二人が一緒にいて間違われるといふことは少し違いますが、一緒にいることが同一環境というよりは二人を遠えさせる要因ではないかなって。例えば一人が何かを積極的にやっているとき、もう一人は相手を凌ぐほど同じことをやろうとせず、サポーターの立場にまわったり、一人がリーダーシップをとると、もう一人がそれをカバーするようになる。何かすべてにわたってそんな感じだったというふうに、私は子育てしながら感じていたのですが。

それで性格の違いも含めた役割交代というのが見られたかどうかについても調べただけけれど、比較的小さいうちのほうが多く見られ、全体では六〇%ぐらい。特に一卵性の場合によく見られるようなのですか。

志村 まず、一緒にいるからこそ個性が分化するというか、伸びるといふ点には大いに納得します。役割の交代ということでは……。

天羽 私は、同じようにやっているかなんて思わないのではないかと(笑)。

志村 思わないですね。スポーツの世界には同じことで頑張っている人たちもいるけれど、たいていの一卵性双生児はあいつがこれをやるなら俺はまあ遠慮しよう、住み分けしますね。

安藤 住み分けにもいろいろなレベルがあつて、職業自体を変えるところのものあれば、同じ職業でも小学校の先生になるか高校の先生になるか、数学の先生になるか英語の先生になるかというのもある。わずかな差であつても、本人たちにとつて結構アイデンティティにかかわっているのかなという気がしますが。

志村 灰谷健次郎の『ふたりはふたり』という作品に、片方が植物博士になつて、もう一方が動物博士になることを決意して、お互いに自分を見つけていくという話があります。僕たちは高校の進学コースでは理系

と文系に住み分けましたが、それぞ
れのペアがちよつとした違いで住み
分けようとするわけです。

天羽 別れられてホツとされたので
すか。

志村 面白いところで、ホツとする
部分と一緒にのほうがよかつたかなと
思う部分が必要あるんですね。

安藤 それから双子の場合、例えば
将来の進路をどうするかというとき
に、片割れのことを意識に上つてく
るようで、そういうのは普通のきよ
うだいには永久に持ち得ない意識で
あり、関係であると思うんです。

志村 別に話し合っているわけでは
ないんですよ(笑)。先に言つたほ
うが勝ちみたいなところがあつて、
もう一方は遠慮しようかなと。

ツイントークとテレパシー

天羽 双子と親との関係でいうと、
例えば一人が先に反抗期を迎えて親
とゴタゴタやっていると、もう一

人はわりと冷静に見ていて、そこに
一緒にかかわつてこないというのが
ほとんどなのです。

安藤 片方が代理経験しているとい
うことなんですかね。

天羽 そうなんです。それで双子に
反抗期があつたかどうかというのを
調べたら、「なし」というのが一卵
性の場合で五七%。それが双子でな
い人と比べてどうなのかというのは
わからなかつたのですが、『ピバ・
ツインズ』という東大附属の先生た
ちがまとめられた本には、「反抗期
を経験しない人が一般児より多い」
と書いてありました。

志村 僕にもなかつたですね。弟が
凄かつたですから。安藤さんの奥さ
んはどうだったか聞いたことがござ
いますか。

安藤 うちの家内のほうがよく親
に反抗していて、お姉さんがそれを
止めるような感じだったようです。
だから表向きは正反対のようだけ
れど、それは表面的なことではな

いか。人間は心のなかにはいろいろ
な自分がありますよね。同じ人間が
いつも反抗しているわけではない。
双子の場合、あるシチュエーション
では、一方には反抗のほうしか出て
こない、それこそ光の当たっている
部分しか見えてこないのですが、影
の部分というのを実は双子の片割れ
が担つてくれていたのではないかと
いう感じがしているのですが。

天羽 それが青年期ばかりでなく三
歳児、いわゆる第一反抗期のときに
もあるんです。二人一緒に反抗した
り、駄々をこねたりということは意
外と少なく、今週はこちらが悪く
て、それが一件落着くともう一人
がという感じ。例えばうちの場合、
一人がご飯を食べながらブツブツ不
平を言つて、それを母親がケアして
やれやれと思つていると、もう一人
が「まずい」とか何とかケチをつけ
はじめるといふ感じで、そうやつて
入れ替わるというか……。

志村 それでは年がら年中大変では

ないですか(笑)。

天羽 でもとにかく二人一緒におみおつけをこぼすなんていうことはない。つまり二人一緒には反抗期を迎えないというのが不思議でしかたなかったのだけれど、志村さんはそういうことを覚えていきますか。

志村 すみません。いいことしか覚えていません。僕たちは哺乳瓶で育てられたのですが、何カ月かたつた頃、二人で体を寄せ合つて飲む方法を編み出したらしく、二人で上手に飲んでいたようです。ただこぼすときは交代でこぼしていたと母は言っています。でも申し訳ないけど本人には記憶がありません(笑)。

安藤 ツイントーク、つまり双子の間だけでしか通じないような言葉を開発したり、お互いにお互いの世界というのをつくつて、そのなかで役割を分担させてみたり、言葉にならないレベルでもかなり共同作業をしていると言われていますよね。そのあたり、双子には何か特別な世界が

あり、それが行き着くところテレパシーの話にまで結びついているのではないかと思うのですが、双子のテレパシーに関してはよくマスコミからも取材されますよね。

私のところにも何回かあつて、一度あまり頭にきたので「ない」ことを証明するため、十九世紀末からの心理学の膨大なデータベースを調べたら、そのなかに「ツインとテレパシー」とか「ツインと超常心理」みたいな文献はたつた三件しかなかった。しかもそのうちの一つは、お腹

のなかに双子がいてすぐ育児不安に陥っているお母さんに、産科医が「子どもにテレパシーを送る気持ちになつてごらん」と言つたら、その出産不安がおさまつてきたという研究で、該当しません(笑)。残りの二つについては、テレパシーがあるかどうか実験したものなのですが、どちらもネガティブな答えしか出なかつた。僕もテレパシーがまつたく非科学的なものだとは思つてないけ

れど、少なくとも双子だからそれが多いということはないだろうと思つています。家内にテレパシーの話をしたら「そんなものまつたくないわよ」と笑つていましたしね(笑)。

天羽 あるお母さんの報告に、「九州と埼玉の大宮とずっと離れて暮らしていて、二人は年に一度か二度しか里帰りしないのに、同じ下着を使つていたり、よく似たハンドバッグを買つていたりして、私はびつくりしているのですが」というのもあつたのです。

志村 テレパシーというより、趣味が似ているということですよ。

天羽 それからテレパシーかどうかということ、しよつちゅうかけてくるわけではないのに、一人が電話をかけてきて、それを切つてしばらくするともう一人のほうが電話してくるといってお話もあります。そういうことがよくあるのです。

志村 それはたまたまではないかな。何十回も電話していればそうい

うこともあるでしょう。

安藤 同じものを買っていたというのがありますか。

志村 それはあります。メジャーリーグのミネソタ・ツインズのヘッドキャップを手に入れたとき、嬉しくて嬉しくて弟にも見せてやろうと思つて、それを被つて駅まで迎えに行つたことがあります。すると同じ帽子を被つたやつがくるわけです。びっくりして聞いたら、彼も同じ時期、同じものを見つけて、僕に見せてやろうと思つて被つてきたのだという(笑)。だけどそれは二人とも野球が好きで、しかもツインズのものだったからだと思います。

安藤 天羽さんの息子さんたちは同じ頃、スポーツをやつていて同じ前歯を折つたということですが。

天羽 でもそれは、二人とも八重歯が虫歯になりかかつていたからで、一人はボクシング、一人はラグビーをやつていたものですから。

安藤 二人ともかなり戦闘的なスポ

ーツをやつていましたね(笑)。天羽 そういうところはたしかに似ていると思いますが。

安藤 いずれにしろ一卵性の場合、趣味や好みにしろ、ライフイベントのようなものにしてはよく似てくる。だから結果としてはよく似てくる。だからそれから先のプロセスも似てくるわけで、そこがテレパシーがあるかのように見えてくるということではないでしょうか。

志村 だから小さいとき、いやいやよく実験をさせられた(笑)。

天羽 そうなんです。離れた場所で別々に同じ絵を描かされたり？

志村 絵ではなく、ほつぺたを叩いて、右左どっちだったか当てる実験のようなものでした。酷いテレパシー実験ですね。

ミラー現象と左利き

志村 ところで、双子に左利きが多いという、例のミラー現象というの

はどうなんでしょう。

安藤 一つ言われているのは、結局ミラー現象の一卵性の双子というのは、受精卵が最初は一つだったのが二つになり四つになりと、ある程度分かれていつて、右、左ができたところで二つに分かれたものだ、と。そのとき右優位、左優位というものができて、それが右利き、左利きと鏡のような形になっていくのだという説なんですけれど。

志村 面白いなと思つたのは「左利きの人のホームページ」です。そこに有名人の双子とか、双子が主人公になっているマンガや映画の紹介コーナーがあるんです。というところは一般の人にも、双子に左利きが多いという知識があるってことだろうなと思つて、ちよつと驚きました。

安藤 これはアメリカの研究ですが、もともと一卵性の双子の男の子として生まれたのだけれど、一方の生殖器にちよつと異常があつて一見女性のように見える形になっていた

ものだから、女性として育つてしまった。これはジェンダーの問題、性の心理学としてはものすごく画期的な問題で、つまり性を決めるのは生まれつきの性でなく、育てられた性で決まるのだという問題が絡んでいるということ、その双子はかなり注目を浴びたのです。

ところが、本来男なのに女の子として育てられた子どもが、思春期を過ぎた頃、自分に違和感をおぼえ、生い立ちを聞いて結局男だったことがわかった。それで手術をして本来の性に戻り、ちゃんと女性の恋人もつくって結婚し、顔も男らしい顔になった。一度ジェンダーの心理学を覆し、もう一度それを覆したという非常に劇的な双子の研究というのがあったのです。

志村 『ブレндаと呼ばれた少年』でしたっけ。そうやって考えてみると、環境だけでも遺伝だけでもないということですね。

安藤 まさに両方が関わっている。

志村 本当に面白いですね。

天羽 この間のアンケートでは、異性の双子は少なかつたのですが、その範囲で一般的に言えるかなと思つたのは、女の子のほうが発達が早いということと、性格的にも「よい子」を演じてしまうのがとても多いことです。男女で比べると幼児期は、男の子のほうが断然弱いんですよ。

志村 甘えん坊になるのかなあ。

天羽 男の子は熱を出したりする回数が多いものだから、結局お母さんの目もよい子にしている女の子のほうにあまり注がれず、男の子のほうにいつてしまう。そういうこともあつてか、ある集会で男女の双子のお母さんが「私は男の子のほうはずつとかわいいと思つているのですが、異常なことなのでしょうか」とおっしゃつたんです。

でも、そういう方が断然多いですね。実際育てるとき男の子のほうに二倍ぐらい手をかけているというわけ(笑)。

志村 男女の双子の場合、家庭内で早くから役割分担させられてしまうようです。僕にも双子の友達が何組もいて、よくそういう話もしますが、いまままでに会つた双子のなかで、双子が嫌だという唯一のペアは男女の双子でした。あとは全員双子で生まれてきてよかつたと言つていました。

やつぱり女の人のほうは家事もたくさん手伝わされるし、お母さんにもそんなにかまつてもらえず、自立へと押しやられてしまうところがあるのでないですか。

天羽 男の子には門限も緩いけど、女の子には厳しい。それで女の子が「なぜ私だけ」と親に食つてかかつていたと書いている人もいました。安藤 そうか。差がはつきりしているだけに、育てる側が当然と思つてつけていた差が、子どもにとつては差別として受け取られていたということですね。

天羽 でも青年期になつてそれぞれ

家庭を持つてからは、みんな仲良しになつていようですから、一時的なことなかもしれないですね。

安藤 そうですね。仮に差がつけられていたといつても、本人同士が意図的につくつたわけではなく、周りがつくつてしまつたわけですから。

双子で世界を眺めれば

安藤 そういう意味では、例えば東洋と西洋の衝突にしろ、イランとイラクの問題にしろ、本来同じものを持つていながら、ちよつとした違いを周りが拡大したり、あるいは周りがそれをどう文脈づけるかで、全然意味が違つてしまうようなことはこの世の中にたくさんあるなという感じがします。

志村 いまイランとイラクの話があつたけれど、サダム・フセインも双子のお父さんだし、ブッシュも双子のお父さんでしょう。だから今回のイラク戦争は悲しいかな、双子のお

父さん同士の戦争なのです(笑)。

権力者が双子だつたら、王権はどつちがとるということが大昔なら大問題になつた。禍根を残さないように殺されたり、どこかに幽閉された。アレクサンドル・デュマの『鉄仮面』がそうですね。ルイ十四世の双子の片割れが顔を仮面で隠されてしまふという話です。

安藤 でも、本質的な双子の仲の良さという面を強調したいですね。

この世界を双子的に見ていけば解決できる問題もあるのではないかと思います。

天羽 双子の研究は、一卵性と二卵性の遺伝的な成因の違いをつかつて、例えば知的なものは遺伝的なかわりあいほどのくらいかなど、もつと人間一般の研究につながる研究をしなければ、発展が少ないと思つていたんです。でも私は双子のかかわり合い方の面白さから目が離せなくなつてしまふばかりでした。

そして、これだけ遺伝的研究が発

達していて、こまかく遺伝形質がわかるようになったのに、これを出生のときに、ぴつたり同じように受けついでいる一卵性双生児つて、本当に不思議な得がたい存在ですよ。それを生かすような研究をして、一般的な人間発達の問題に還元していくようにしたいと思つています。

私は、忙しかつたけれど、本当に楽しい双子育てをさせてもらつて、いろいろ面白いことを発見して嬉しかつたです。でも今度生まれてくるなら、双子として生まれてきたいと思つているんです。

安藤 ヒトゲノムが解明された今日、双子は遺伝の語り部としてその重要性に改めて注目されるようになってきました。こうしてみると双子というのは人類の文化や歴史の中で、常に大きな役割を果たしてきたのですね。

話はつきませんが、それでは今日は、このようところで終わりにしましょう。